一、家作等之事。
一、一季居奉公人男女給銀之事。
右之品々は儉約之基に候間、其要文を致會得、萬端約に取行候儀肝要之事に候。衣服等外邊迄麁相成品を用ひ、內々費有之候ては無詮事に候。婚禮之式等茂可成程省略之儀、双方頭々委事承屆可及指圖候。一季居奉公人男女給銀之儀、享保十四年相觸候處、其後猥に罷成候。畢竟高給銀に召置候もの有之故、猥に成行候躰。第一風流異躰に徘徊いたし候女を、高給銀に召置候族茂有之由相聞、不愼之至に候。右相觸候趣嚴重に相守可申候。若及違背候者有之候ば、公事場に相斷可申候。急度遂僉議可申候。右給銀高等之儀、尙更右場奉行よりも申談候樣申渡候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々に茂不相洩樣可被申渡事。
右之趣可被得其意候。以上。
（寶暦元年）閏六月　本多安房守

二七　寺庵祠堂銀・座頭官銀等貸借利率之儀觸

寺庵方祠堂銀幷座頭共官銀之儀、古來より之振に違ひ、利足相增貸渡、其上禮米等取候族相見候筋不宜候に付、此所急度相糺、被仰付樣茂有之候得共、其段は御用捨被成候條、唯今迄貸付置候分利足、幷是以後之利足之儀も、一歩充に相極、遂指引可申候。且又向後は借用證文に請人相立、頭・支配之奥書を取候迄にて、藏縮證文等は取請申間敷事。
但、唯今迄相對を以年賦等に致置、利足一歩より以下又は無利足等之分は、尤唯今迄之通指引可仕候事。
一、右借用之元銀急に取立候ては、指つかへ申族も可有之候間、以相對貸主納得之上、緩々取立候樣取計可申候事。
一、右之通申渡候以後、若一歩之利足より高利に貸渡、中取次之ものにても禮米等取請候族有之、出入之儀致出來候而も不及貪着、貸付候者急度可被遂御吟味候事。
一、他國之寺庵方祠堂銀等、御當地町人等取持候而貸付、唯今迄之利足之儀茂、此度祠堂銀可爲同事候。且又他國銀、唯今迄致口入候銀高之分は其通に候。向後は他國銀致取持貸渡申間敷候事。
右之通寺庵方・座頭共等に申渡候樣、寺社奉行・町奉行に申渡候。御寺方等祠堂銀は、尤唯今迄之通に候條、組・支配之人々にも不相洩樣可被申渡候事。
以上
（寶暦元年）辛未九月

二八　會所銀返上及び貸渡方之儀觸

會所裁許御貸銀返上之儀、今年米下直にて難澁之躰に付、右借用之人々元利共當暮返上一統御用捨被成、御切米等之人々茂來春返上之儀右に准御用捨被成候。且又近年他國詰之人々等及難儀候躰に候。夫に付會所銀、當時之趣にては、一旦借用之砌迄之潤色に而、度々致江戸詰候者等は、年々彌增之難澁に罷成候樣子に付、來正月より別紙之通被仰付候旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々にも可被申聞候事。
（寶暦二年）壬申十一月

會所銀知行當り之覺
一、他國詰人等百石に付一貫目充之事。
但、借用之翌年より五ヶ年に返上無利足之事。
一、御領國地廻り之分百石に付六百目充之事。
但、返上之趣等右同事。
一、新番以下御扶持方・御切米之人々は、他國詰人等六百目充、地廻り之分四百目充返上之趣等、前段同事。
一、知行當り借用之翌年、他國幷地廻り往來之節、證文相改候儀可爲勝手次第候。且借用之內一兩年分返上之上、他國詰等幷地廻り往來之節證文改、知行當之高に引足借用之儀、勝手次第之事。
一、人により、知行高當より內を以借用之人々も、其內を以右御定之通五ヶ年に返上之事。
一、去未の年以來只今迄之知行當り借用之分は、無利足にて自今之知行當之內に立込可申候。然共來年中他國幷地廻往還仕者は、來々戌年暮より五ヶ年之返上、來年中他國幷地